



令和2年度

鹿児島県の教育

2・3月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

桑畑明斎
薩摩川内市立川内北中学校長

チーム校長会

毎年楽しみにしていた県校長研究大会が中止となった。未曾有の事態への対応に迫られる学校経営に、どの校長も、手探りの不安な日々をじっと耐えてきた今年度にあつて、夜の懇親会も含めて、仲間と語り合うこの会も自粛となったことはとても寂しかったと思う。退職の年となる今年度、県の中学校部会副部長の役をいただき、本部役員の方々が、校長の存在意義と仲間意識をモットーに運営される姿にふれる機会を得て、私にとつては貴重な研修の場になった。そして、県のためにとはいかないまでも、せめて、薩摩川内市の校長会のために何かせねばという気持ちになつた。

そこで、薩摩川内市の役員と相談して、「一人の悩みを皆で共有し、校長会がチームとして課題解決をめざす」ことをコンセプトとした、語らいの場を設けることとした。土曜日上午前中に行つた主体的な研修の場は、時間が経つことさえ忘れさせ、大きく時間を超過して終了した。会は三部構成とし、第一部は、教育課程編成に当たつての市教委への要望や連携の在り方について、事前に採つたアンケートを基に全体協議を行い、役員と市教委と

の意見交換の場で提案することとした。第二部は、学校経営上の課題をテーマ別に五つの分科会で行い、危機管理としてのクライシスマネジメントの重要性や分掌組織の活性化による課題解決の在り方、教頭を活かす育てるためにも、課題を共有し、協働して解決策を模索することなど、本音で語る様子は、正に「考え、議論する」を地で行く姿であつたと感じた。第三部は、喫緊の課題として、人事評価・人事異動について、実践発表に基づいて全体協議をし、校長としての基本姿勢を確認しつつ、即効性のある研修となつた。

後日、協議のまとめとその時の資料など、全校長に配布するとともに、市教委との意見交換会にも活用した。校長先生方から寄せられた感想には、「参考となる取組を知ることができた」「学校現場が、少しでも働きたいのある環境になるよう校長同士の連携を大切にしていきたい」「校長会のまとまりを感じた」など、企画・運営の手心えと、今後の発展性を実感できた。時には孤独であることを痛感する校長職は、一人校長室で思い悩むこともある。だからこそ、「校長会は、一人一人の悩みを皆で考えるチーム」を合い言葉にこれからも団結していきたい。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和3(2021)年2・3月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



松ヶ崎の歴史と史跡

松ヶ崎郷土史研究会会長 下世吉美

略歴

一九八七年 陸上自衛隊退官
 退職後 第一工業大学広報課長・生涯学習課長、松ヶ崎地区公民館長等歴任
 現在 松ヶ崎郷土史研究会会長
 垂水市文化財保護審議委員

私の住む垂水市牛根麓の松ヶ崎小学校校区は、桜島口から霧島市方面へ約六キロ、奥錦江湾の海沿いに位置し、前は海、後ろは鹿倉峠を中心に、深山幽谷雑木天を覆う所です。ここは、地形的にも最適な隠れ場所として古い時代から現代に至るまで、著名な史跡が数多く遺されています。私たち松ヶ崎郷土史研究会では、郷土の歴史を掘り起こし、広く伝えていくことを通して、郷土に誇りや愛着をもつため、郷土史研究の活動を続けています。それでは、主要な史跡等について少しご紹介します。

○安徳天皇の伝説と居世神社・御陵など

安徳天皇は、長門国赤間関壇ノ浦の戦いで、二位の尼に抱かれて入水されたといわれていますが、実は屋島を落ちのびた平家の人々が大君をお守りし、周防大島から日向灘を南下され、硫黄島を経て、牛根麓の地に漂着されたと伝えられています。牛根麓集落にある「居世神社」は居世（コセ）神社といえます。実はこれは居世（イセ）とも読め、平家に関係の深い「伊勢」のことを意味しており、ここに安徳天皇をお祀り申し上げていると伝えられています。

お社の御神殿の正面の梁に金色燦然と光る菊の御紋章は、皇室との関係を何より有力に物語っています。お亡くなりになって茶毘に付された小鳥神社の跡や、御陵が祀られている牛根麓の集落は、平家の落人が住みついた所だとい

われています。ここでは安徳天皇の御潜居地の居世神とともに、宮崎小路・中小路・東小路という古の京風の地名が現在でも使われています。

○牛根麓の稲荷神社の埋没鳥居

桜島の黒神の埋没鳥居は、早くから県内外に広く知られているところですが、牛根麓の埋没鳥居をご存じでしょうか。私どもの地域では、元亀から天正のはじめにかけ、薩・日・隅の三州統一をめざす島津氏と、これを阻止する肝付氏との激しい攻防戦が、牛根麓の標高百八十一メートルの山城、松ヶ崎城（牛根城・入船城）を中心に繰り広げられました。

この戦いの結果、島津氏が領有することになり島津氏の守り神、稲荷神社がこの地に創建されたのですが、後の大正三年の桜島大噴火で鳥居も埋没しました。神社が山手の山中でもあり、地元の住民からも、すっかり忘れられたような存在になっていましたが、郷土史研究会の働きかけで、県の事業による埋没鳥居周辺整備が行われました。現在、鳥居の上部が掘り起こされ、大正大噴火の名残を見ることができま

○宇喜多秀家公の潜居地跡

豊臣政権下の五大老の一人で岡山城主の宇喜多秀家公は、関ヶ原の戦いに西軍の武将として出陣しましたが、敗れて薩摩の島津氏を頼るととし、山川港に入ります。

この報せを受けた島津氏は、牛根の平野家

匿うよう命じます。平野家では、秀家公とその家臣に自らの上屋敷を提供して面倒を見ており、潜居地跡が辺田集落にあります。この平野家は平家の水軍であったといわれ、航海術や造船技術にも優れ、当時は島津氏の琉球交易にも貢献していたようです。また、平氏の落人を追って来た源氏の追討使七人を葬ったのも平野家のご先祖です。辺田集落にはこれにまつわる七人塚が遺されています。

○幕末の秘密造船所と戦時中の秘密基地

幕末に西欧列強のアジア進出に危機感を抱いていた島津斉彬公が、海防の強化を図るため、幕府に隠れ二隻の軍艦を建造・進水させた脇田造船所跡が麓集落にあります。

また、先の太平洋戦争の末期に、海軍水上機場の秘密基地本部が松ヶ崎小学校に置かれ、周辺の海岸が整備されています。

この他にも、安徳天皇と平家の落人伝説以来今日に至るまで、松ヶ崎小学校校区には、隠れ潜んだ歴史の跡が多く遺されています。

○松ヶ崎郷土史研究会の今後の活動

地域の歴史を学び、史跡等の整備を図り、郷土のよさを後世に伝えること等を目的として、史料に基づく学習や研修をはじめ文化財等の整備清掃活動を今後も継続してまいります。



今こそ「不易と流行」を考える

上小川小(始) 中村俊一

一 はじめに

正直言って「提言」というほど自信をもつて言えるものはない。しかし、私自身の中で以前から、また最近更によく頭に浮かぶようになったある一つの言葉がある。それは、使われ古された言葉であるが「不易と流行」である。この「不易と流行」について述べ、私の「提言」としたい。

二 「流行」

教育における「不易と流行」については言い尽くされた感もある。特にここ数年の教育における「流行」のスピード感や広がりには目を見張るものがある。教科となった外国語、プログラミング教育パソコンやタブレットの日常化……。横文字が多く溢れ、最初は何のことやらと思わせたGIGAスクール、SDGs……等もようやく最近では耳慣れてきている。

教育は社会における変化に無関心であってはならないのも事実である。時代の変化とともに変えていく必要があるもの、すなわち「流行」に柔軟に対応していくことも教育に課せられた重大な使命であると自覚している。

三 「不易」

しかしながら、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値あるもの、すなわち「不易」も存在する。

他人を思いやる心や自らを律しつつ他人と協力できる姿勢、美しいものを美しいと感じる豊かな感性や自然を愛する心など、世の中の情報化や国際化がいかに進展しようとも、いつの時代でも、そしてどこの国でも大切にされなければならない「不易」は確実に存在し続けるのである。

教育の本質とはこのような「不易」を一人一人の子どもたちにしつかりと身に付けさせることなのではないかと思っている。教育に携わる者として、時代を超えて変わらない価値あるものを常にしつかりと見極めることの大切さを改めて痛感している。

忘れ物をして困っている友達に「これ貸してあげる。」とそつと手を差しのべてあげる子、実物を目の当たりにして「わあ、すごい。」と目を輝かせる子、持久走できついけれど歯を食いしばってあきらめずに力いっぱい取り組む子……。学校にはまだまだ「不易」も溢れている。その小さな「不易」を見逃さないアンテナを張り巡らし、子どもたち一人一人にその「不易」の価値あるものを少しでも多く育んでいくしかないと思っている。

四 おわりに

世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス。学校が臨時休業に追い込まれ、全国的に教育活動が停止……。かつてこんな事態があっただろうか。その後、現在でも多くの場面で教育活動が制限されたり、行事等が中止や延期を余儀なくされたりしている。

しかし、このような時代だからこそ、目の前の事象に振り回されることなく、「不易と流行」をじっくりとくみしめる時ではないかと最近をよく思う。「流行」に柔軟に対応しながら、たとえ教育活動の変更や停滞があろうとも、我々は常に教育の本質、価値ある「不易」をしつかりと見つめ、できる限りのことをしていくしかないと考えている。



年齢に応じた段階的体験活動

大隅中(隅) 中村 順人

一 はじめに

屋久島の環境学習施設を皮切りに、長い期間体験活動を推進してきた。子どもたちの自然体験や生活体験の企画から安全面を重視した運営に携わってきたが、学校の中で体験活動を行う時間は限られており、子どもたちに必要とされる体験を十分に提供できていないのが現状である。学校でできること、家庭でできること、地域や教育施設等でできることをトータルして考え、年齢に応じた体験活動を段階的に推進していく必要がある。

二 体験活動の効果と実態

国立青少年教育振興機構は「子どもの頃の体験は人生の基盤」と提唱し、自然体験、手伝い、地域活動、友達との遊びなどの体験活動を推進している。これまでも様々な実態調査を行い、各種体験が豊富な青少年ほど道徳観や正義感が強い傾向にあることや自己肯定感が高い傾向にあるという調査結果を発表している。また、成人の意識調査では、子どもの頃の体験が豊富な人ほど、大人になってからのやる気や生きがい、モラルや人間関係能力が高い傾向にあるという調査結果も出ている。

体験活動の重要性は多くの人々が認識して

いるが、各家庭においては保護者の意識に左右され、経済的な面からも体験格差が生じているのが現状である。現在は情報通信機器の発達により室内でのゲームやバーチャル体験に興じる子どもたちも多い。社会教育の分野では各団体が体験活動の推進に積極的に取り組んでいるが、単発的な活動が多く、経験を踏まえたステップアップ型の体験活動は少ない。年齢に応じた体験機会を計画的に作っていくことで、豊かな感性や自己肯定感を育み様々な課題に自らチャレンジし、未来を切り拓こうとする子どもを育成できるのではないかと考える。

三 連携・協働による体験活動の充実

新学習指導要領では、教育課程の実施に当たって、社会に開かれた教育課程の中で地域的人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったり、社会と共有・連携しながら実現させることとしている。管理職が自校の児童・生徒の体験活動の実態を踏まえ、県教委が推進する「かごしま地域学校協働活動」の中で、地域と学校をつなぐ実働的な地域学校協働活動推進員を発掘して積極的に活用していく必要がある。

そして、校務に地域学校協働活動を位置付けて、学校職員の意識高揚を図るとともに、子どもたちの健全育成に必要な体験をすべて拾い上げ、家庭で体験させるべきこと、学校で体験させられること、地域社会や社会教育団体等に依頼することを地域学校協働活動推進員とともに分類していく。学校、家庭、地域社会教育等で年齢に応じた体験活動を段階的に創出することで、体験格差の是正につながると考える。さらに、この体験活動を通じた地域の方々とのつながりによって、学校の各種教育活動への支援へと協働活動を広げることができると考える。

学校外団体の体験活動の資金不足には、国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」を積極的に活用する方法がある。鹿児島県は本年度も多くの団体が子どもゆめ基金を活用し各種体験活動をそれぞれ実施している。より多くの団体が有効にこの基金を活用することで、安全で充実した体験活動を幅広く実施することができる。

四 おわりに

コロナ禍で各種活動に様々な制限があることに閉塞感をもちストレスが多いといわれている。先に述べた子ども頃の体験が、大人になってからのやる気や生きがいにつながることを考えると、小さい頃からの体験の積み重ねが今後は更に大きな役割を果たしていくと考える。全ての子どもにも各種体験が系統的に育まれ、先の見通しが難しい社会生活でも、新しい生活を切り拓いていこうとする子どもたちが育っていくことを期待したい。



奄美の優れた伝統・教育風土

を生かした学校経営

名瀬小(大) 廣司 正良

一 はじめに

創立百四十八年の歴史と伝統に輝く本校は、教育の島、人材の島といわれる奄美の学校教育の始まりの学校である。卒業生や保護者・地域住民は、学校に寄せる期待と信頼・協調性が強い。このような本校では、「歴史と伝統の重みに学ぶ」ことを児童の母校愛・郷土愛を育む拠り所としている。

また、市街地の中心部に位置し、官庁や商店街に囲まれ名瀬新港が校区内にあり、人の往来や物資の流通が激しく交通量も多い校区で、現在の児童数は三百六十三人である。それでは、本校の特色ある教育活動をいくつか紹介する。

二 日本復帰運動に関する各種行事等

奄美群島は、昭和二十一年に米国軍の統治下におかれ昭和二十八年に日本復帰を果たした。当時の先人たちは、奄美の子どもたちに日本の教育をという強い気持ちで運動に立ち上がり、それは「非暴力の民族解放運動」として世界でも希有の運動であった。

八年間に及ぶ運動の足跡は、本校校庭を拠点に何十回にも及び、現在でも当時のままの石段がどっしりと腰を下ろしている。

(一) 日本復帰記念の集い

毎年、十二月二十五日になると、本校校

庭において、関係者、近隣校の児童、島民が集い、日本復帰を祝い集いが行われる。

本校六年生児童が、復帰運動の中心となった、泉芳朗氏の「祖国へ帰るその日まで命を懸けて訴え続けよう。」という内容である「断食悲願」の詩を石段に立つて堂々と披露する。詩に込められた先人の思いを受け継ぎ、郷土を愛し、新たな奄美の時代を開く人間として育ってほしいと願う。

(二) 平和学習を位置づけた修学旅行

太平洋戦争最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁の平和記念公園では、毎年、追悼式が行われている。ここでは、沖縄の子どもたちが、かつての沖縄戦に思いを寄せた詩を朗読している。

そこで、沖縄県糸満市兼城小学校との交流を通してお互いの歴史や文化について見聞き、平和の尊さを学ぶとともに、奄美への理解をより深める学習を行っている。

(三) 石段でのあいさつ運動

本校では、五・六年生による始業前のボランティア活動と復帰運動の拠点となった石段で毎朝、大きな声で「あいさつ」と「校



三 郷土伝統文化の継承

奄美では、旧暦の八月に穀物の収穫を祝う「八月踊り」が現在でも伝えられ、運動会では、全児童が練習してきた踊りを保護者・地域の方々に披露している。

また、宴席のクライマックスで全員が入り乱れて踊る「六調」も校庭いっぱいには保護者や地域の方々も入り笑顔で溢れている。もちろん、伝統継承のため三線やチヂン太鼓、島唄も児童が演奏している。



四 校章の由来から学ぶ

大正十四年に制定された校章は、外輪は大島の山に咲きほこる白百合を形どり、中央には名瀬小の「名」の文字を置いたものである。白百合には、尊厳・潔白・真実・美しさの意味がある。児童には、「悪い行いをせず、善い行いをし、正々堂々と胸を張って生きる人間になりましょう。」と機会あるごとに話し、先人の思いを伝えている。

五 おわりに

奄美で生まれ、育ち、学び、体験した種がやがて芽を出し、自信となり、いずれ島立ちするであろう子どもたちが、夢と希望を持ち明日を担う人材として実ることを期待する。



地域とともに歩む学校を目指して

古仁屋高 重吉和久

一 はじめに

本校は、奄美大島南部の瀬戸内町に位置し昭和五年六月五日に大島郡東方村立古仁屋家政女学校として創設された。その後、鹿児島県古仁屋実科高等女学校、鹿児島県古仁屋高等女学校と改称し、昭和二十二年四月に古仁屋青年学校を統合し、古仁屋町実業高等学校として現在の地に移転された。さらに昭和二十四年に瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校、昭和二十五年に奄美群島政府立古仁屋高等学校と改称した後、昭和二十八年十二月の奄美群島の日本復帰に伴い、鹿児島県立古仁屋高等学校の校名になる。その後、幾多の変遷の中で学科再編がなされ、商業科・水産科・家政科などの学科が廃止され、昭和五十四年から普通科だけの単科高校として現在に至り、令和二年度に創立九十周年を迎えた。（記念式典等は、新型コロナウイルス感染症対策のため令和三年度に延期となった。）

二 教育方針

本校は、普通科のみ（二年次から進学コース、情報ビジネスコースの二コース制）全校

生徒九十八人の小規模校であるが、『ひとりひとりが主役』をスローガンに掲げ、豊かな人間性と向上心をもち社会に貢献できる生徒の育成を目指している。また、瀬戸内町唯一の高等学校として、地域と共に歩み、地域に支えられて躍進してきた。

三 進路状況

進路状況は年によって異なる。近年は、進学と就職が二対一程度である。進学は県内外の専門学校が中心であるが、毎年数名が国立大学へ進学している。また、就職は、県内希望が多く、毎年一〜二名が地元瀬戸内町に就職している。進路希望が多岐にわたるため、学力面における早期の個別指導やきめ細かな面接指導を全職員で取り組み、生徒の進路実現につなげている。

四 地域との連携

(一) 地域みらい留学制度

少子化の影響を受け、大きく定員割れが続く中、令和元年度から、学校と地域が一体となり『地域みらい留学制度』をスタートした。この制度は、瀬戸内町のバックアッ

プのもと、島外からの生徒を受け入れ、古仁屋高校の活性化を図ることを目的としている。令和二年三月に女子寮が完成し、留学生の生活環境も一段と整ってきた。地元の生徒と留学生が互いに刺激し合い、学校がより一層活性化するように生徒・職員ともに頑張っているところである。

(二) 地域資源の活用

瀬戸内町は、白糖製造工場跡や奄美大島要塞に関する戦跡など多くの近代遺跡群を有している。令和元年度に「地域創生人材育成プロジェクト」実施校として、これらの地域資源を活用し、地域の方々の協力のもと、高校生ガイドによる観光ツアーを実施した。この研究を引き継ぎ、地域の遺跡や戦跡、観光資源などを活用した総合的観光プラン作成につながる郷土教育を目指している。

五 おわりに

本校は、『ひとりひとりが主役』をスローガンに掲げ、授業、行事、部活動、ボランティア活動などにおいて、生徒・教職員一丸となり取り組んでいる。これからも、地域になくはない高校として、地域から信頼され、愛される学校を目指すとともに、地域の方々の協力を得て、生徒自身が地域を知り、瀬戸内への愛着を深めることで、将来的に地域の後継者として、あるいは応援者として貢献できる人材の育成に努めていきたいと考えている。



子どもが輝き続ける教育を目指して

小湊小(南) 西 耕 治

一 はじめに

日本三大砂丘吹上浜の最南端に位置する本校は、北は白砂青松を眼下に、南は長屋山から連なる緑の山々を仰ぐ風光明媚な土地で、今年創立百四十二年目を迎える。児童数は年々減少傾向にあり、完全複式の三学級に特別支援学級二学級を加え五学級の二十六名である。「わくわく登校、いきいき学び、小湊が大好きな子どもを育てる」をキャッチフレーズに日々教育活動の充実に取り組んでいる。

今回「子どもが輝く教育」という題をいただき本校の取組の中で特徴的な二点について紹介する。

二 取組の実際

(一) 子ども伝統訓の朗唱

本校には、大正七年から平成の初めまで続いた校訓「五つの論し」という教えがある。東郷平八郎元帥直筆の「校訓」の書を譲り受けた当時から受け継がれるものである。校歌にも歌われるこの「五つの論し」を近年伝統訓として位置付けてきたが、本年度は、その伝統訓を児童にも分かり易い口語体に改め、「子ども伝統訓」として位置付けることとした。

長州藩松下村塾の土規七則や会津藩校日新館の什の掟といった古からの教えは、現在もそのまま、また、新たに形を変えながら教え継がれている。会津若松市における「あいづっこ宣言」などはその代表的なものである。本校においても先人の教えから、いかに社会が変化しようとも時代を超えて、時代を切り拓く子どもたちの育成を目指して先述のように「子ども伝統訓」を位置付け、毎朝朗唱することとした。

子ども伝統訓

- 一 礼儀正しくする
- 一 親切にする
- 一 きまりを守る
- 一 力を合わせ協力する
- 一 精一杯頑張る

本年度九月からの取組であるため、華々しい成果が表われたとまでは言えないが、地域の方々から「あいさつをよくするようになった。」「はい、という素直な返事が聞かれるようになった。」「との声をいいただき、学校内外の活動でその成果が見えつつある。継続することによって、自ずとその成果が現れてくるものと期



朗唱する子どもたち

(二) 待っている。

地域に伝わる伝統芸能の継承

小湊鎌 hands 踊りは、小湊小学校の運動会でのみ披露される伝統芸能である。運動会に向けての練習自体が唯一の継承の機会となっている。そのことは子どもたちにもよく理解されており、本年度のような運動会の午前中開催に伴う競技種目の削減の中でも「鎌 hands 踊り」は欠かすことのできない演目となっている。子どもたち一人一人が伝統を支える継承者であり、後々に伝える唯一の伝承者であることを自覚しながら取り組んでいる。それ故に練習はいつも真剣である。真剣でひたむきな努力の中にあるからこそ、キラキラと目を輝かせて舞うのである。



運動会での披露

三 おわりに

コロナ禍の中、先の見えないトンネルの中でも日々が続いている。今まさに、この難局をいかにして乗り切るか、教育現場の苦悩は続く。おそらく、唯一絶対の答えはない。今ある教育的資源を最大に生かし、「子どもたちのために」今できる最大限のことを行う。その一点に尽きる。本校は、子どもたちが輝く、また輝き続ける教育活動を実践するために、先人の教えから、いかに社会が変化しようとも変わることのない普遍的な不易の人間教育を進めることで、この難局を乗り越えていきたいと考える。



地域とともに育てる伊崎田学園の子

伊崎田小(隅) 山 崎 誠

一 はじめに

本校は、今年で創立百四十六周年を迎え、平成三十年四月に本校と伊崎田中学校は、小中一貫型教育校「伊崎田学園」として開校した。伊崎田学園は、一小学校と一中学校で構成されており、校長を含む職員組織はそれぞれにある。校区の大部分は兼業農家で、肥沃な土地を利用しての畑作中心の農業経営が行われ盛んである。ここでは、小中一貫型のキャリア教育に基づいた、コミュニティ・スクールとしての取組を紹介したい。

二 取組の実際

(一) 地域の人材育成としてのキャリア教育
本校区は、IOTを活用した農畜産等の多角化経営を推進している地域である。地域の実情やこれからの時代を見据えて、児童生徒一人一人の夢の実現に向け、論理的思考を育てるプログラミング教育等の取組を行い、九ヶ年の継続したキャリア教育を進めている。
その中心として「プログラミングクラブ」を設立し、保護者・地域・学校で協力して推進している。

(二) プログラミングクラブの実際

ア 一年次の取組

プログラミングの基礎を学習するために、小学五・六年生を対象に鹿児島大学と連携したテレビ会議を活用した(プログラミング)学習を行い、方位を示すコンパス作りや低学年向けのゲーム開発を通して、興味・関心を持たせた。また、保護者を対象にプログラミング親子セミナーを実施した。受講を通して、文部科学省が示す「生きる力」につながる「二十一世紀型能力」の実践力について、地域参画力・人間関係形成力・自律的活動力の育成が必要であることを保護者にも理解していただいた。

そして、学校運営協議会において「地域に根ざしたIOT関係の取組」グループを設置し、学校教育のプログラミング教育と地域の主要産業である農畜産業の取組をモデルに、将来の人材育成の在り方を模索しながら活動を進めている。

イ 二年次の取組

小中の接続を意識し、「九ヶ年を見通し

たキャリア教育」の取組として、小中合同の「プログラミングクラブ」を設立し活動を行っている。志布志市ICT支援員の協力をいただき、毎週木曜日の放課後に「身近な学校課題を解決する」というテーマで学習を進めている。

取組例として「夜間、学校にやってくる野生生物を追い払うことができるか。」というテーマでグループ毎にアイデアをプログラミング化して検証を行った。試行を重ね、最終的に「人感センサーで認知後のカメラフラッシュ」による効果を確認でき、実践の成果を味わうことができた。

また、これらの成功体験を基に地域の産業に視野を広げ、農業生産の効率化など地域の課題解決に取り組もうとする意欲に繋がってきている。

三 おわりに

キャリア教育の観点から進めている活動が、プログラミングという一つの手段により、大人と子どもが共に学び合う場や地域とつながる場になるコミュニティ・スクールとしての役割を着実に広げてきている。

今後も伊崎田学園の教育を充実・発展させるために、キャリア教育の観点から系統的に共通実践を重ね、未来の担い手として主体的に学び、思いやりをもって行動できる心身ともに健やかでたくましい伊崎田の児童生徒を育成していきたい。



自分を信じる

宮川小(市) 諏訪原 裕 子

研修係をしていた時のことだった。研究公開の当日、研究発表の練習をしていると、先輩がわざわざ体育館まで足を運び、

「どきどきしますか。いつもの調子でやってきたことを信じて、発表すればいいのですよ。今の自分にできることを精一杯やれば、何も怖いもんはないでしょう。」と励ましてくださった。緊張の糸が緩み、すうっと肩の荷が下りたような気がした。よく見せようと気負っていたのだろう。お陰で、無事に研究公開を終えることができた。それ以来、何か大事なことがあるたびに、なぜか、この時の言葉を思い出す。何事においても、これまでの努力の積み重ね、努力の如何による処が大きく、自分を信じることが大事である。そのために、自分自身、結果より過程、

準備をしつかりすることに心がけてきた。

将棋界の最年少記録を次々に塗り替えて活躍を続ける藤井聡太棋聖も小さい頃から毎日大好きな詰め将棋を続け、プロになってからもコンピュータソフトでの研究を続けているという。秀でた才能とともに地道な努力の積み重ねが躍進の原動力であろう。以前、一流になるための条件として十年一万時間ルールがあると聞いたことがある。練習の量と質、両面が欠かせない。ただ、練習するだけでなく、よくなるように工夫し続けることも必要だそうだ。実に興味深い内容であった。

自分に自信をもつことは自己有用感、自己肯定感につながるものだ。子どもを取り巻く環境も刻々と変化しているが、SDGsの推進にも見られるように、未来を切り開く子どもたちには、なりたい自分になるために日々努力を続け、自信をもつて、輝く未来を自分なりに創り出してほしいと願っている。

「校長先生、ソフトボールの試合で優勝しました。」とトロフィーと賞状を見せてくれた笑顔が眩しい。努力を皆で大いに称えたい。



「先生って

謝ることができない人種」

冠岳小(日) 町田 実 徳

「ありがとうとごめんなさいはすぐ言えるようにしようね。」

私はいつも全校朝会等で子どもたちにこう話す。それは、私自身の自戒の念から生まれた教訓でもある。

現在の私があるのは、これまでに出会った多くの方々のお陰であり、恩師や上司、先輩や同僚、保護者からたくさん言葉の掛けていただいた。その言葉にいつも励まされたり示唆を受けたりしてきた。「心に残るひとこと」の原稿依頼を受け、何を書こうか悩んだが、教師としての私の姿勢を決めたと思う教息子からの一言について書くことにした。

新卒の期限付教員として赴任したK小学校で四年生の担任として初めて教壇に立ち、右も左も分からないまま自問自答の日々を過ごしていた。三か月ほどが経ち、ようやく一学期の終わりが近づいたある日、一人の女兒から言われた一言が胸に刺さった。

「先生って謝ることができない人種ですよね。」教師としてと言う前に人間として未熟な自分をその子に見透かされたと思い、内心ハツとした。謝ることで教師としての威厳が失われると思ひ、たとえ自分が間違ったことを言っただけで

かつていても、言い訳をしておまかしていた。指導力の無い自分の弱点を必死に隠そうとしていたのだと思う。その日を境に、非は非として認め謝り、自分にも他人にも正直に生きることを決めた。虚勢を張っていた日々から解き放たれ、とてもすっきりした気持ちになったのを覚えていた。誰に対しても誠実に接する。このことを教えられた気がする。

私の勤務する冠岳小学校は今年度末に閉校となる。新任校長として赴任して二年、本校最後の校長として学校の締め括りを見届けることになった。子どもたち一人一人が残された日々を存分に満喫し、次に羽ばたけるよう、それを支える職員が意欲を持って教育活動に取り組めるよう、校長として誠実に接していきたいと思う。

先輩からの温かい言葉が・・・

大始良小(隅) 釘 本 隆 洋

私が赴任した小学校での出来事である。小規模校から約五百名の中規模校へ転任し、新しい校務を任されていた。六年担任や体育主任と規模の違う学校で毎日頑張っていたが、仕事のプレッシャーからかある日、学校に行きづらく

なった。任された仕事はあるし、予定している学校行事もあるのは分かっていたが、どうにも体が動かない。ストレスによるものでしばらくの休養が必要と診断され、学校を休むことになった。学校のことは極力考えないようにしたのだが、やはり気にかかる。

のんびりと一日を過ごすことがなかった私を毎日のように先輩や同僚の先生たちが気軽に訪問してくれた。学校とは関係のない他愛のない話や世間話をして帰って行く。多種多様な仕事に取り組む時間を割いて私のために顔を出してくれた。その中でも一番記憶に残っているのは、教務主任の先生が話したことであった。私をリラックスさせようと肩や背中を揉みながら

「何でも完璧にこなそうとしない。きつい時は、近くにいる私たちに頼みなさい。その逆もあるのだから。」

この言葉が私をどれだけ勇気づけたことが、新しい環境で何でも一人でやり遂げようとしていた私の言動を肌で感じ、的確なアドバイスをしてもらった。あの時の優しい口調と手の温もりは今でも忘れられない。それを契機に時間をかけて学校現場へ復帰した。個性の強い先生方が多く、時には、衝突することもあったが、自分のペースを守りながら六年間勤務することができた。独りよがりでもできると勘違いしていた自信家が、一人一人の子どもを大切に育てる教師に少しは近づけることができた。校務分掌という組織の意味や、プロとしての意識、心

身の健康の大切さなど多くのことを学ぶことができた。自分を支えてくれた人たちの存在が、現在の自分につながっている。いろいろな人たちとの出会いを今後でも大切にしていきたい。

事前の一策は、 事後の百策よりも勝る

鹿浦小(大) 折 田 卓 己

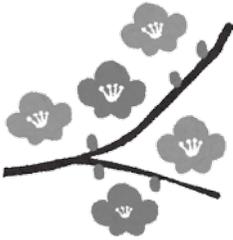
「事前の一策は、事後の百策よりも勝る」この言葉は、教頭職二校目の頃、当時、指導主事をされていたM先生から御指導いただいた言葉である。以来、校長職に就いた現在でも座右の銘として、また、安全管理のスローガンとして常時、校長室の黒板に掲示している。

平成二十一年度に施行された学校保健安全法では、「各学校において、学校安全計画及び危険等発生時対処要領(危機管理マニュアル)の策定を義務付けるとともに、地域の関係機関との連携に努めること」とされている。また、文部科学省では、「学校の危機管理マニュアル作成の手引き」の中に危機管理を進める上の対応として、「事前の危機管理(事故等の発生を予防する観点から、体制整備や点検、避難訓練について)」「個別の危機管理(事故等が発生した

際に被害を最小限に抑える観点から、様々な事故等への具体的な対応について」「事後の危機管理（緊急的な対応が一定程度終わり、復旧・復興する観点から、引き渡しや心のケア、調査・報告について）」の三つに分けて記載してある。中でも「事前の危機管理が、その後の対応全てにつながります。いつ起こるか分からない事故等にきちんと備えることが重要です。」とも付加されている。標記の言葉は、まさにこの中の事前対応を網羅した言葉だとも言える。

M先生とは、T町で教諭時代を数年、共に過ごした旧知の間柄である。その当時、親身になって子どもたちの指導に当たっておられたM先生ならではの配慮あふれる言葉であると感じている。

学校経営を任される立場となった現在、子どもたちの学力向上を図ることも重要だが、まずは、命あつての物種である。子どもたちの命を守るために、より一層奮励努力していくことを目標としている。この言葉を銘肝しながら。



ある日の校長講話



心の向きはそろっていますか

一 湊小熊 横手正嗣

みなさん、おはようございます。

まずこの言葉『脚下照顧』（カードを提示）を知っていますか。読み方や、意味が分かる人がいますか。難しい言葉ですね。

それでは今度は、この写真を見てください。先週休み時間に写してきました。どこの写真ですか。（トイレの写真です。）そうですね。トイレの入り口の写真ですね。何か気付くことはありませんか。（スリッパがばらばらです。そろっていません。）

そうですね。スリッパの向きがばらばらだったり、そろっていないかったりするよね。近頃、トイレに行くたびにスリッパがばらばらになっていて悲しい気持ちになることがあります。どうしたらよいでしょう。（そろえてあげたら

よい。忘れないように気をつける。等）
そうですね。みんなの言うとおりです。授業の始まりのチャイムが聞こえるとあわてて教室に帰るので、そろえるのを忘れる人がいるのかもしれないですね。

最初に尋ねた『脚下照顧』という言葉は、「きゃっかしよう」と読みます。この言葉は、禅の教えからきています。お坊さんが座禅を組んで修行する禅寺の下足箱には、この文字が書いてあるそうです。これは、「他の人に向かって理屈を言う前に、まず自分の足元を見て自分のことをよく反省すること。また、足元に気を付けよ」という意味で、身近なことに気を付けようと言うことです。トイレのスリッパや自分たちが脱いだはき物がきちんとそろっているとき、一人一人がきれいにそろえることができる一人一人がきれいにそろえることができる一人一人がきれいなとよいなあと思います。はき物の向いている先は自分の未来を指しているとも言われます。はき物の向きも心の向きも、そろっているとよいですね。



「新しいからきれい」と 「古いから汚い」

吉田北中(市) 松 元 直 範

一年前にこの学校に来て、「四十年以上の歴史のある校舎である。」という説明を受けて、頭に浮かんだのは「危険箇所は?」「雨漏りは?」という不安でした。グラウンドも草が生え、水はけのよくない場所には苔も生えていました。新しく建て直すことは現実的に難しい。ならば新しい学校に見間違えるように磨き上げてみてはどうか。鬱蒼としていた庭の樹木を伐採し、隠れていた池を蘇らせ、周りの桜、梅、紅葉を剪定して日本庭園のようにしてみんながくつろげる空間を作ってみました。中心の池には地域の方からもらった錦鯉を放流しました。ゆつくりと見てください。学校周辺にあった樹木も伐採して日当たりのいいグラウンドになりました。みんなの校舎もカビや苔で黒ずんでいたところを磨いたらとても明るくなったと思います。

ヨーロッパのある古い国では、新しい物を建設するのと同じくらいに既存の建物の保守、メンテナンスをすることが重要だとされています。新しく建てられた建造物にはそれに貢献した人の名前が刻まれることがよくあります。その国ではその建造物のメンテナンスに大きく貢献した人の名前もその建物に刻まれ、偉大な業績を残した人として歴史にその名を残しています。

す。今、この学校の校舎やグラウンドをみんなの手で整備したことで、明るくきれいな学校になり、後輩から「あの先輩たちがここまできれいにしてくれたお陰で、私たちは楽しい学校生活を送れているんだ」と言われるようになると思います。そういう意味で、みんながやつてきたことは本校の歴史に名を残すことになると思います。先日の台風で避難された方が「先生、この学校のトイレはどうしてあんなに綺麗なんですか?」と言われました。「子どもたちが一生懸命磨いているからです」と応えました。もしみんなが「学校が綺麗ですね。」と言われたら、「私たちが綺麗にしたんです。」と胸を張って堂々と答えてもらいたいと思います。

就職・進学試験に向けて

隼人工業高 大 迫 浩 之

今朝は久しぶりに全員が集まる機会となりました。日ごろ感染症予防対策で多くの我慢を続けている生徒の皆さんを称えるとともに、コロナ禍の一日も早い終息を願います。

さて、三年生の六割が挑戦する企業の採用選考が、例年より一か月遅れでいよいよ始まります。進学試験も推薦入試やAO入試が既に始

まっています。これまで臨時休業等、様々な制約を受けながらも、進路選択や受験に向けて真摯に取り組んで来た三年生が、その成果を存分に発揮できるように、職員一同心から応援しています。

「人間が行う仕事の約半分が機械に奪われる」と言われたのは皆さんが小学校低学年の頃です。その後の技術革新や環境の変化により、仕事の在り方が大きく変わります。しかし私は、人間の仕事が奪われるのではなく、機械にできることは機械にさせて、人間にしかできない仕事が増える時代になると考えています。創造性や協調性が必要な仕事は将来においても人が担うことは間違いありません。これからどんな仕事に就いても、創造力やコミュニケーション力、そしてチームワークが大切です。これらのスキルを身に付け、変化に対応できる人材となる意欲を、就職・進学試験で堂々とアピールしてください。

二年生は十一か月後には自分たちの番です。この先もどんな困難に直面するか分からない、ということこそコロナ禍の教訓として、今できることを一つずつ積み重ねていく、また、常に一歩先を見据えて準備するよう心掛けてください。これから体育大会や文化祭など、大きな行事も続きます。新しい生活様式の中で、ソーシャルディスタンスを保ちつつも、「心を一つに」仲間と協力して成功させてください。

それでは三年生の健闘を祈ります。

話のひろば



あなたを

待っていた

建昌小(始)

池田尚人

の希望を持つことにつながっています。

この方は、前任校でも、南日本新聞の子供のうたや若い目、伝統芸能の継承等の様子が掲載されると、思いを載せた自筆のフアックスを送ってくださいました。子どもや職員も喜びましたが、私自身が、自分では気付かなかった価値や考え方を学ぶ機会となりました。

校長の喜びは、何だろうと考える時があります。子どもたちの自慢のあいさつをほめられた時、職員室で職員が各学年部のテーブル中央に置いてある元気の出る秘密の箱を開けて、子どもや授業の話をしている時の職員室の雰囲気など、それぞれの感じ方や受け止め方は違うことでしょうか。また、その姿に、子どもや職員の成長やつながりを感じ、校長は「にこにこ」にな

着任時に、「先生を待っていた建昌小ですね。」とお手紙をいただきました。毎日読み返し、勇気と明日への

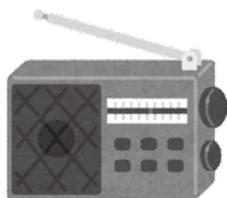
るのだと思います。

初任者の頃、「教師は、人を励ます言葉を持つ。」と、当時の校長先生から教えていただきました。また、ある保護者からは、「MBC南日本放送の朝のラジオ番組モーニング・スマイルで『どんな野球選手になりたいか。』と問う祖父に、『ホームランを打てる選手になりたい。』と、応じる場面がある。そのやり取りが大好きで、毎日のように拝聴して、我が子の成長と重ねている。」と、聞いたことがあります。

その時、言葉のもつ力を感じるとともに、私と話をすると元気が出ると言われる人になりましたと思つたものです。

大人が、大人を指導しており、ひたむきに行う助言や何気ないやり取りの積み重ねが、職員の成長と変容につながると考えています。すぐに、早急な結果や変容を求める自分がいることも事実です。そこにも、校長職の難しさや魅力を感じています。

また、「言葉づかいは、心づかいですよ。」と教えを受けたこともあります。言葉には、人柄が現れるとのこと。自らを振り返る言葉が、私を支えています。子どもも職員も、「にこにこ」の学校を目指します。



偏差値72

(六年算数)

長浜小(北)

川村俊弘

「教師にとつても必要な資質は、素直さと謙虚さである」

この言葉は、串木野小学校教諭時代、当時のO校長からいただいた言葉である。「素直さと謙虚さ」をもった教師でないと、教師としての資質は向上しないというO校長の教えであったが、邪念の多い私には難しかった。

平成十九年四月、新任教頭として奄美市立笠利小学校に赴任したとき、現在、伊佐市立大口小学校に勤務するH教諭と出会った。「偏差値七十二(六年算数)」は、彼がたたき出したNRT(算数)のクラスの平均値であり、私の教師生活の中で目にした最も高い数値で、今後これを超える数値を見ることはないだろうと思う。

その年、笠利小学校は、「PIISA型読解力」の育成を目指した算数の研究公開年度に当たっており、当時五年担任だったH教諭は、公開授業者に決定していた。最初、彼の算数の授業を参観したとき、子どもたちが受け身で、挙手も少なく、教師中心の知識注入型授業に終始していた。これではいけないと思い、H教諭に対するマンツーマン指導が始まった。「子ども一人一人の興味・関心を高める課題設定の方法」「全員が挙手する発問の仕方」「基本的学習過程の在り方」等、算数の授業に関することを、徹底

して教えたり、時には授業をしてみせたりした。彼は、教わったことや私の授業をみて感じ取ったことをスポンジのように吸収していった。そんな彼に、私が作成した五年算数の百七十五時間分の指導計画を「これを参考に授業づくりをすれば、絶対に力がつくから。」と言って渡した。彼は素直に、その指導計画を自分なりにアレンジしながら、授業を積み重ねていった。

研究公開の授業内容は「台形の求積公式」の発見だったが、子どもたちから十とおり以上の等積変形・倍積変形の考えが出され、それが一つの公式に収束すると子どもたちから歓声があり、大成功の公開授業となった。

次の年、日教諭は同じ子どもたちを六年生でもつことになり、出した数値が前述の数値である。そのことを私が称賛すると「いえ、全て教頭先生と子どもたちのおかげです。」と微笑んだ。彼こそO校長先生のおっしゃった「素直で謙虚」な教師なんだと実感した。大口小学校でも中核として、きつと活躍しているに違いないと確信している。



脱ハンコとDX

川上小(日)

北 洋 昭

十数年前、異動に伴う引越して不動産屋に行った。よい物件が見つかり、さあ契約というときに印鑑を忘れたことに

気が付いたが、自宅に取りに戻るには遠すぎる。「サインじゃだめですか。」と聞くと「重要な書類だから印鑑で。」急いで近くの量販店で百円の認印を買ってきてボタンと押しして事なきを得た。しかし、落ちていて考えるにつれ「重要な書類」と「誰でも買える百円のハンコ」のミスマッチに違和感が沸々と湧いてきたことを覚えている。

そして、今回の政府の「脱ハンコ」宣言。政府のDX(デジタルトランスフォーメーション)の一環で、簡単に言うと、慣例的に行われてきた手続きなどを見直して、今後はデジタル化で効率的・創造的に物事を進めましょうという取組である。コロナ禍のテレワークなどにより民間企業のDXは急速に進んでおり、政府もデジタル庁を新設するなどして行政のDXの推進を図っている。

さて、学校はというと、十月に文科省から脱ハンコをはじめ学校便りや保護者との連絡などについて、見直せるものはデジタルでという通知が発せられた。報道によると保護者は概ね歓迎ムードのようだが、学校現場はどちらかというとこのような変化への対応は鈍い。学校に

よって様々な事情があり、慣例的に行ってきた方法や内容を変えることに不安と負担感が伴うことが多いためだろう。しかし、そのような積み重ねが、現在、世の中と学校とのギャップとなつて表れているように思う。

一方、学校教育のDXも「GIGAスクール構想」によりこれから大きな変化が訪れる。児童生徒一人一台のパソコン整備を機に、学校教育が世の中のDXの波に乗れるかどうかは、我々教員がこれまでの指導法をどう見直せるにかかっている。慣れたやり方にこだわることなく、情報化、国際化、そして、超高齢化が進む我が国でたくましく生きるためには、子どもたちにどのような経験をさせ、どのような力を付けていくべきかを考え、取り組んでいきたい。



読書案内



■齋藤 孝 著

友だちってなんだろう？

星峯西小(市) 土田 史郎

原稿依頼の封書が届き、「今回の領域は何だろう」と思いつつ、「一番苦手な分野だ」と苦笑いしました。私にとつての読書はこの歳になっても、「習慣化」されたものではありません。子どもたちには偉そうに「読書は大切だよ」いいながら……。残念な限りです。

『コロナ禍の中にあつて 現在社会において人間関係の希薄化 子どもとの付き合い方 保護者対応の難しさ』等、いずれのキーワードも教育界においてコミュニケーション能力の育成という観点から喫緊の課題です。

職員室でこの課題を職員と軽い感覚で雑談し

た日の放課後、雑談の中にいたA教諭が一冊の本を手を持って校長室にやってきて、「この本に今日の雑談のヒントが盛りたくさん書いてあるんです。是非読んでみてください。」

著者の齋藤氏は、明治大学文学部教授です。『語彙力こそ教養である・大人の語彙力ノート』等、ベストセラーの著者であり、テレビでコメントーターとしても活躍中です。

■友達つきあいは無敵にする三つの力

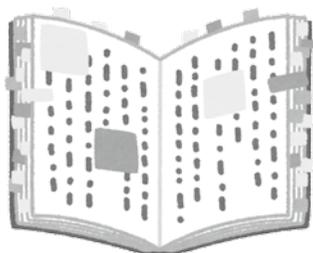
①「気の合う友だちをつくる」力

②「気の合わない相手とつきあう」力

③「ひとりを楽しめる」力

十代を強く意識した内容ですが、大人にもおすすめて著者は語っています。仕事以外の友だちをたくさん多く持つことが大切だと述べています。先生方はいかがですか？

誠文堂新光社 一三〇〇円＋税



■宮部みゆき 著

三島屋変調百物語事続
あんじゅう

鶴川内小(北) 川野 博司

「語って語り捨て、聞いて聞き捨て」の決まり事がある江戸・三島屋の黒白の間で、主人公のおちかが語り手から様々な話を聞いていくという物語、毎回作品の中に引き込まれ、時間を忘れてどんどん読み進めてしまいます。

物語は、許嫁を殺害されたおちかの心の傷を癒やそうと、叔父の伊兵衛が江戸中から不思議な話を集め、その聞き役を任せたことで進んでいきます。語り手を通して、ただ単に怪談や奇妙な世界が繰り広げられるだけではなく、江戸の風俗や地方の人々の暮らしなどが散りばめられているので面白く読むことができます。その中では、客人を黒白の間に迎えるに当たり、季節の花を生けたり、相手に合わせた掛け軸を準備したりする様子、身だしなみを整え正装で応対する姿、話の頃合いを見てお茶を勧める場面などから、これまでの私の接遇のまずさについて反省させられることでした。

「あんじゅう」という書名、シリーズの内容

から暗獣という漢字かなと思つて目次を見るとそのとおりでしたが、カバーのイラストは真っ黒いかわいらしい姿です。この暗獣、老夫婦が引越してきた古い屋敷に現れたのです。夫婦は「くろすけ」と呼んで可愛がつていましたが、本来、人に触れられてはいけない屋敷の魂だったので、だんだんと弱つていったのです。そこに気付いた夫婦は、やむなく引越します。読みながら、私は癌で亡くなった飼い犬を思い出していました。散歩で立ち止まることが多くなり、おかしいなと思つて診察したときには手遅れでした。きっといろいろなサインがあつたはずなのに、気付かないままだったのです。

さて、その後の「くろすけ」について気になる方は読んでみてください。

三島屋変調百物語はまだまだ続きます。黑白の間でどんな話が語られるのか、そして、おちかはどう変わっていくのかが楽しみです。

角川書店 八一九円＋税



■梅沢正邦 著

神さまとぼく 山下俊彦伝

大笠中(南) 菊川 浩 幸

松下電器産業(現パナソニック)を代表する人物といえば、創業者の松下幸之助氏を思い浮かべる方がほとんどだろう。本書は「経営の神さま」と呼ばれ、文化事業にも力を注いだ立志伝中の人物、幸之助に見込まれた三代目社長・山下俊彦氏の功績と人柄を詳細に記している。

一九七七年、二十六人の取締役の中で末席から二番目で、松下家との血縁もない取締役の大抜擢は「山下跳び」と呼ばれ世間の注目を集めた。固辞するも根負けし、就任発表会見の席上で「選んだほうにも責任がある」という名文句を吐いた。しかし、幸之助の目は確かだった。退任するまでの九年間で売上高二・二倍、経常利益一・九倍に成長させた。

社長就任後は現場を回り、従業員とコミュニケーションをとることに努めた。「私は偉くない社長」と語り、同社の強さの基盤となった「事業部制」を尊重した。全国の問題工場、問題事業部を訪れ、社員たちと車座になった。斬新なアイデアが成功すると一緒に喜ぶ。「家電王国」

から総合エレクトロニクス企業への転換も断行した。本書では経営幹部やスタッフらが生き生きと描かれていて、山下や彼らが目の前にいるようだ。経営者に寄せる熱いメッセージも多い。「ほろびゆくものの最大の原因は驕りです。過去の栄光におぼれて、新しいもの、あるいは困難なものに挑戦する気迫を失つたためです。強さはそのまま弱さに転化します。」

「社員一人一人が主体的に課題を見つけ、それに挑戦し、個々の成果が燃り合わされて、全体の目標が達成されるのが望ましい。」

「個人を犠牲にしてのチームワークであつてはならない。個人を大切にし、個人が生かされたチームワークでなければならぬ。」

学校経営の在り方、リーダーのあるべき姿等々、沈黙考する時、大きな示唆を与えてくれる珠玉の一冊であり、山下俊彦が学校経営を任されたならどうするか考えるのも一興である。

東洋経済新報社 一八〇〇円＋税



以前勤務していた県立の青少年社会教育施設では、年間延べ六万人を超える来所者を対象に、様々な研修（活動）プログラムの指導を担当してきた。来所者は集団宿泊学習で来所する小・中学校や高等学校の児童生徒のみでなく、幼児から高齢者までの方々が研修や主催するイベント等の参加などで当施設を利用してくださっている。

研修を目的とした入所団体には、キャンプ・ウォークラリーなどの「野外活動」や竹とんぼ、塗り箸などを作る「創作活動」、キャンプファイヤーなどの「交歓活動」などの活動プログラムを準備し、できるだけ団体の希望に添って実施できるようにしている。私が勤務した三年間では、「野外活動」の「カヌー体験」が一番の人気プログラムだった。九十三人が定員の大型カヌーで施設近くの川を上ったり下ったりする活動は、日常生活ではなかなか体験することができない。それが人気のある理由の一つかもしれない。

一方、「創作活動」で人気があったのは、「サンドグラス」という飾り物だった。一辺が5cm程のキューブ型のガラス容器に色砂を少しずつ敷き詰め、いろいろな模様作りを楽しむ活動である。一般的にはカラーサンドアートと称して色砂を使う創作物はあるが、市販の色砂を使用することが多い。しかし、当施設で使用される色砂は職員の手作りである。近くの海岸の砂を採取し、洗浄と異物除去を繰り返し、乾燥させてか

趣味・文芸

地元の素材を使った創作活動との出会い

菱刈小(始) 宮本 京也

らポスターカラーで砂に色をつけ、また乾燥。ダマになるのでこまめにふるいをかけ、細かい粒のさらさらな状態に仕上げる。色の種類は十色以上と豊富に揃え、一度にある程度の量をつくるので、全工程に一月以上を要する。この話を「サンドグラス」作成中の研修生にすると、みんな驚き、砂を大切に使おうとする。自作ですごく状態のよい色砂に仕上げることにみただけが、地元の砂を使っていることに感心していた。

このように、当施設の数ある創作活動の材料を見てみると、多くは地元にあるものを使用し

ている。県内の同様な施設もそうだと思う。収集してそのまま使用することができるものがほとんどではあるが、竹や桜の枝などは適当な長さや厚さに切ったり削ったりして使用する。そのまま使うものの代表はどんぐり。施設の敷地内にはシイの木がたくさん植えられているため、毎年大量のどんぐりを集めることができる。当施設にはどんぐりを材料とする創作活動はいくつかあるが、「どんぐりストラップ」は比較的新しいプログラムであった。作り方は簡単で、どんぐりにストラップと小さな鈴をつけるだけ。安全面に注意すれば小学校の低学年や幼児でも作ることができる。どんぐりはそのまま

もよいが、大きなものはペスタイプのポスターカラーで色塗りをしてもいいし、小さいものならニス塗るだけでもきれいな飾り物になる。

この茶色の実を包んだ美しいニスの光沢に魅せられて、現在の勤務校においても作成し、校長室内に飾ってある。もちろんどんぐりは勤務校近くの公園で採集したものである。この夏の大台風により桜の枝がたくさん落ちたので、それを材料として「桜の枝のストラップ」も作成した。また、地元の材料ではないが、私的に集めていた小さめの貝殻を使用して「貝殻ストラップ」を作成した。部屋に飾ってあるものを見て、一年生に一番人気

があつたのはニスで仕上げたどんぐりだったので、生活科の時間に子どもたちが集めたどんぐりを使用して、ストラップづくりをした。説明をきくと聞いて自力で作ることができたので、子どもたちはとても喜んでくれた。

前任地で出会った創作活動が今では趣味となりつつあり、他の地元の素材も使用して新たな作品を作っていきたい。また、身近にある地元の材料を使ってもものを作る楽しさをもっと本校児童や保護者、地域コミュニティにも広げていき、それが感性豊かな子どもの育成に繋がればと思っている。

次は、地元の伊佐檜チップを材料にと考えているところである。



過去から未来へ

香月小(隅) 井上 貴文

一 フロムしぶし

しぶしの海から 広げよう
地球は丸いよ 一つだと

南の海から 広げよう
小さなやさしさ 波のせて

志布志(ここ)は 出合いの街
新しい笑顔が おどる街

しぶしの海から 広げよう
これは、志布志市のイメージソング「フロムしぶし」の一番の歌詞である。赴任して間もない頃、中学校時代の同級生の娘さんが、小学五年生の時に作詞したものであることを知り、親近感を覚えるとともに、合併して新たに誕生した志布志市の希望にあふれる未来に懸ける願いが、みずみずしい感性で表現されていることに感動したものである。

「志」あふれる街で、「志」を高める教育に日々邁進している。

二 志布志市の概要

志布志市は、鹿児島県東部、志布志湾の湾奥ほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、

西部は大崎町、北部は曾於市と境をなし、その一部は宮崎県都市と接している。志布志湾沿岸部一帯は、日南海岸国定公園の一部として指定され、沖合約四キロメートルに浮かぶ枇榔島は、枇榔島亜熱帯性植物群落が、国の特別天然記念物に指定されている。また、港湾の機能を軸に陸海交通の要衝として流通機能を中核に発展しており、鹿屋市、都城市、串間市などの地域経済圏とのつながりが緊密である。さらに、志布志港は、九州唯一の中核国際港湾に指定され、外資コンテナ貨物取扱量も増大し、今後ますますの広域的な発展が期待されている。

三 志布志市の歴史

志布志の名の由来は、この地を訪れた天智天皇が、滞在中に主人の妻と侍女がともに布を献上したことを「上からも下からも志として布を献じたことは誠に志布志である」とし、志布志とよんだと伝えられている。廃藩置県により一時的に宮崎県の所屬となったり、志布志津(志布志港)での貿易で栄えていたが開国時の開港の選定から外れ明治から大正にかけては衰退したりという時期を経験しながらも、昭和に入り、港湾整備事業や国鉄路線の整備等によって大隅半島東部における要衝へと変貌を遂げた。また、「臨済宗十刹」として屈指の禅宗寺院となった大慈寺や「薩摩三名刹」として運慶作の如意輪観音像を本尊とした宝満寺などを中心に栄えた歴史も趣深い。

四 きらり輝く三つのおしえ

志布志市は、合併した旧三町(志布志町・有明町・松山町)の教育で育んできた教育的素地を基盤として、「煮しめのおしえ」(個性の伸長)・「つけあげのおしえ」(確かな変容)・「にぎりめしのおしえ」(感謝の心)の「きらり輝く三つのおしえ」を基本理念として、学校・家庭・地域がしっかりと連携しながら、宝石の原石ともいえる子どもたちが、「きらり輝く」教育を推進している。地域全体で地域の宝である子どもを育てる環境作りに努め、未来を切り拓く力と豊かな心、健やかな体を育む信頼される学校教育が展開されている。

五 縁は異なもの

新規採用で本地区の小学校に赴任した頃、枇榔島の離れ瀬から志布志市の街明かりを見つめ、それぞれの明かりの下に人々の生活があるのだろうと思ひ、どんな子どもたちがいるのだろうかと思ひを巡らせた記憶がよみがえってくる。三十年の時を経てこの地の教育の一翼を担わせていただいていることに感謝している。過去と現在をよく知ることで郷土愛の心が育ち、新たな志布志市を創造する意欲もわいてくる。子どもたちにはふるさとのよさを十分に知ってほしいと願う。

最後に「フロムしぶし」の一節を記し結びとしたい。

志布志(ここ)は 歴史の街

過去と未来の夢 語る街

志布志(ここ)は 輝く街

星も花も人も 光る街

専門部だより

〈総務部〉

一 教育機関・関係団体との連携

県教育委員会をはじめ県PTA連合会、県教頭会との連絡会等を実施し、情報交換や連携に努めた。

今年度は新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、例年、学校経営上の課題について意見交換を行ってきた県教育委員会との連絡会・懇談会は中止し、県退職校長会との会合も見送ることとなった。

県PTA連合会との連絡会では、学校での新型コロナウイルスへの感染防止策について多くの質問があり、予防のための予算確保や設備等について意見交換がなされた。困難な状況の中でも、工夫しながら本来の教育活動を行っていききたいという学校の意見に対して、保護者から協力を惜しまないという声が聞かれた。関連して、保護者との連絡体制や広報の仕方が取り上げられた。連絡等に関してメール配信での有効性や利便性が話題となり、ホームページを活用した発信にも期待が寄せられた。

県教頭会とは業務改善について、具体的な事例を通して現状を共有し、好事例を参考に話し合いが行われた。今後、取り組んでいくべき内容について、相互の理解が深まった。

二 学校予算に関する要望活動

県内各校長会からの意見・要望をまとめた要望書を作成し、十一月十六日、県教育委員会に対して学校予算に関する要望を行った。これまで継続して要望を行ってきた教職員配置改善については、専門性のある人材の配置や業務改善に寄与するであろう新たな職の設置などを要望した。

旅費や施設・設備については、新型コロナウイルスの影響を配慮した弾力的な運用や予算確保をお願いした。

県教育委員会からは、特別支援学級の増設に伴う教職員の確保や国の動向、今日的課題の解決を踏まえた教員配置に努めていくことや、感染症対策に関連した交付税の適切な活用について、市町村教育委員会に周知する旨の回答をいただいた。

三 各地区校長会との連携

例年、夏季を中心として各地区の校長会と連絡会を開催してきたが、県内の感染状況が広がりをみせる中で、開催を縮小せざるを得なくなった。本年度は、鹿児島市、北薩、始良・伊佐、大島地区の4地区と会合を開き、特に大島地区とはWebでの会議となった。やはり、新型コロナウイルスの影響下での教育活動のあり方が話題の中心となり、情報の共有や学校間の連携の重要性について意見交換を行った。

四 その他の各種会合等の開催

計画に従い開催を準備したが、年度前半は総会や常任委員会をはじめ多くの会合が紙上によるものとなった。九月以降は会合を精選し、必要に応じて開催した。

〈研究部〉

一 鹿児島県小・中学校長研究大会 紙上開催へ

一 大会主題

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

令和二年十一月十二・十三日開催予定であった研究大会は、コロナウイルス感染症への対応のために、紙上開催となった。

研究部では、年度当初から開催が危ぶまれる中、どのような状況にも対応できるよう、例年どおりの開催案の他に、短縮開催案、紙

上開催案について検討してきた。短縮開催案は、県内全校長が参加できることを基本に、全体会のみを一日で開催する案であった。講演やシンポジウムを実施する全体会場の三密状態解消のために、全体会場と分科会場に半数ずつ入り、分科会場はリモート視聴とするよう計画していた。

各分科会発表については、令和三年度の発表担当が既に行われていることから、紙上発表とならざるを得ない状況であった。

何とか例年どおりの開催ができないかと模索していたが、県内におけるクラスター発生、以後の発生状況、県外の動向等を勘案し、九月九日の連合校長協会役員会で紙上開催が決定された。

なお、本年度講演予定であった人事育成コンサルトの北山邦子氏には、来年度ご講演いただく予定である。また、「活力ある学校づくりに向けて」と題して予定していたシンポジウムも、来年度同じ主題で実施する予定である。

二 九州・全国の研究大会

県研究大会同様、令和二年度の九州・全国の研究大会は全て紙上開催となった。研究発表予定者で貴重な原稿を執筆していただいた校長先生方、ありがとうございます。

九州地区小学校長協議会研究大会大分大会

丹波小 福島慎一 校長（第五分科会）

上場小 安藤政英 校長（第七分科会）

全九州中学校長会研究大会長崎大会

大崎中 竹本 准 校長（第四分科会）

大川内中 山崎幸一 校長（第六分科会）

全国連合小学校長会研究協議会京都大会

発表なし

全日本中学校長会研究協議会和歌山大会

発表なし

令和三年度の研究大会は、全連小は石川、

九小協は福岡、全日中は静岡、全九中は沖縄が開催県の予定。コロナウイルスの沈静化により無事開催されることを願っている。

〈人事給与部〉

一 人事・給与及び人事評価制度に関する調査

〔令和二年度の人事・給与に関する意見と令和三年度への要望〕二教職員の人事評価制度に関する意見・要望について、全校長アンケート調査を実施し、その結果をもとに、県教育委員会への要望書を作成した。

二 県教育委員会への要望活動

〔県教育委員会への意見・要望の会〕〔参加者・県教育委員会（教育長他十八名）、県連合校長協会（会長他十六名）を、十月二十七日に、ホテルウェルビューかごしまで実施し、次の点を主に要望した。

（一）人事異動について

（ア）校長が、より主体的に学校経営を推進できるように、人事異動に関する校長の具申を十分に尊重する。

（イ）教員交流研修など、多様な交流をより積極的に推進する。

（ウ）スクールサポートスタッフや、ICT支援員等の業務改善に係る人的配置に努める。

（エ）臨時的任用教員が未配置とならないように努める。

（二）給与や人事評価制度について

教職員の人事評価の処遇への反映については、「人員分布率の範囲内で、任命権者である県教委の責任と判断で行う」という説明を今後も徹底して周知した上で、評価者能力の向上を図るための研修を実施して、円滑に公平・公正な人事評価を行う。県教育委員会からは、実施状況を踏まえ、総合的に検討していくとの回答を受けた。

〈広報部〉

令和二年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた活動が円滑に進めることができた。

一 月刊「鹿児島の教育」

「随想」は、県下各地において様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。特に教育以外の分野からのお考えや思いに触れさせていただいたことは新鮮であった。また、会員の提言や実践事例、各種話題等は、学校経営に生かせる内容になっており、研修資料としても活用できるものであった。

二 特集号「鹿児島の教育」第六十六号

特別寄稿には、内之浦宇宙空間観測所所長の峯杉賢治氏から、宇宙空間の研究の現状とロケット発射台を二つ有する本県の素晴らしさと子供たちへの期待を伝えていただいた。（株）オフィス・カミーユの上柚元勝氏からは、鹿児島島の思い出と夢をもって精一杯取り組みことの大切さを伝えていただいた。どちらも、私たち学校教育に携わるものはもちろんのこと、次代を担う子供たちにも伝えたい内容であった。

三 「師の道」四十八号

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに、ただただ感動するばかりで、心から敬意を表する次第である。

四 「講演録」発行

本年度の教育講演会は、新型コロナウイルス感染症への対応のため見送りとなったため、講演録は発行できなかった。

編集

後記



とある校長先生方の集まりのことです。退職される先輩方の思い出話で大いに盛り上がる席上、突如鳴り出す各参加者の携帯。それぞれの学校の教頭先生からの連絡でした。「総理大臣?」「一斉休校?」二月二十七日の首相会見、未曾有の事態の幕開けでした。あれから一年。何が何やらわからぬまま時間が過ぎていったような気がします。

三年間「鹿児島の教育」に携わらせていただきました。全県下の会員の皆様に先立ち、真つ先に先生方の原稿を読むのは、役得といつてよいでしょう。編集作業をする中で、先生方のお顔を思い浮かべたり、ゆかりのあった学校や地域を懐かしく思い出したりすることでした。ここに、今年度最後の「鹿児島の教育」を発行することができました。御多用な中に玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様に感謝申し上げます。

春風や闘志いできて丘に立つ（高洪虚子）
今後、世の中はどのようなようになっていくのか、これまでの学校生活は取り戻せるのか全く予想が付きません。しかし、まだ冷たく吹きすさぶ風に立ち向かい、厳しく困難な目標に挑戦し続ける皆様に敬意を表するとともに御多幸をお祈りします。

最後に、この度退職される皆様長い間ありがとうございました。次は、「師の道」でお会いしましょう。

（南中学校 新田 薫）